

【産業転換と生活】

大蔵永常（一七六八〜？年）は、江戸化政期、商品・貨幣経済の農村への浸透に着目して『農家益』

『公益国産考』を書き、付加価値の高い作物の栽培を広めました。これは産業起こしでもありますが、

例えば燈用植物の栽培による蠟や蠟、油の普及は、夜の読書や寺子屋、寄り合いなど、それまで寝るしかなかった生活を劇的に変えることにつながりました。明治になって普及定着したものは、現在地方の特産品になつてい

るものもあります。これらの生産のための土木工事がされ、商品の流通を支える海運などの全国的ネットワークも形成されました。

いま私たちは、ダウンサイズ社会の困難のなか、この産業起こしの志に学ぶことが

大切です。このときの成果は、その後石油を軸とする産業への転換（中央集権化、グローバル化）によって相当消滅しましたが、いまこそ地方分権・地域

主権の地域づくりで、〈地域の財〉として再発見し

活かせるものがたくさんあることでしよう。

生活教育 キーワード

北海道はそのような〈江戸時代〉がなかったところで、石炭産業も明治以降（ほとんど昭和！）、稲作やメロン作りなどの農業でさえ近代からあれこれ取り組まれた産業です。まずこんな短期間に新しい産業を興していたこと、おこせることに自信を持ちたいところです。

炭鉱は、〈次の〉産業起こしがうまくいきませんでした。テーマパークなどに巨額の投資をした結果、〈種籾〉がなくなつてしまひ、廃墟になつたのです。リニア新幹線に初期投資だけで九兆円も使うことは、炭鉱の歴史に学んでいないように見えます。

「パネルシアター」で、産業の転換を担う専門家と連携していることは、次の産業をつくりだす新しい希望です。

（研究部・加藤聡二）

〈参考文献〉

①小島慶三『江戸の産業ルネッサンス 近代化の源泉をさぐる』（中公新書）中央公論社、一九八九年。特に第四章。

②吉岡宏高『明るい炭鉱』創元社、二〇一二年。